

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和4年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第4号（7月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎ 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス : <http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス : [nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)



## 農薬の安全使用に努めましょう

### 農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)  
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

## 農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

令和4年度 病虫害発生予報 第4号

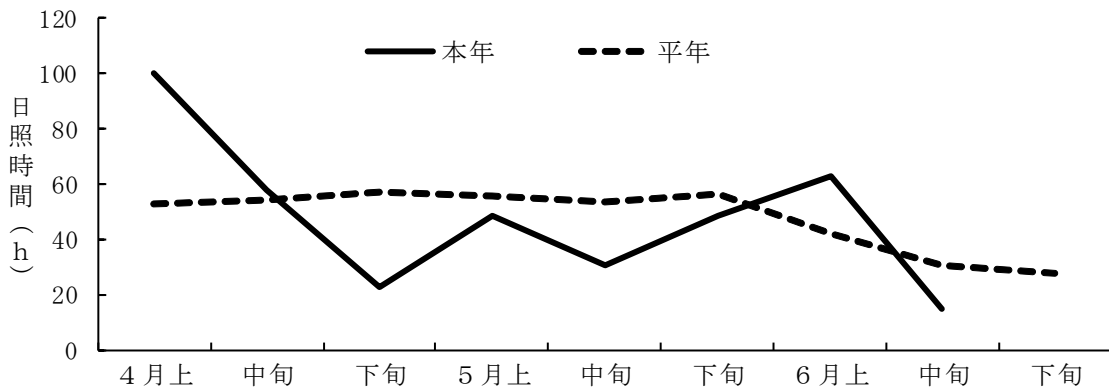
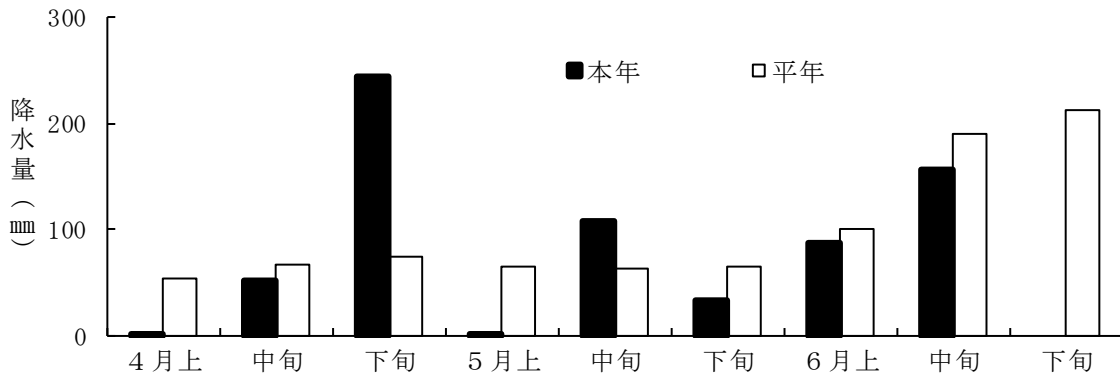
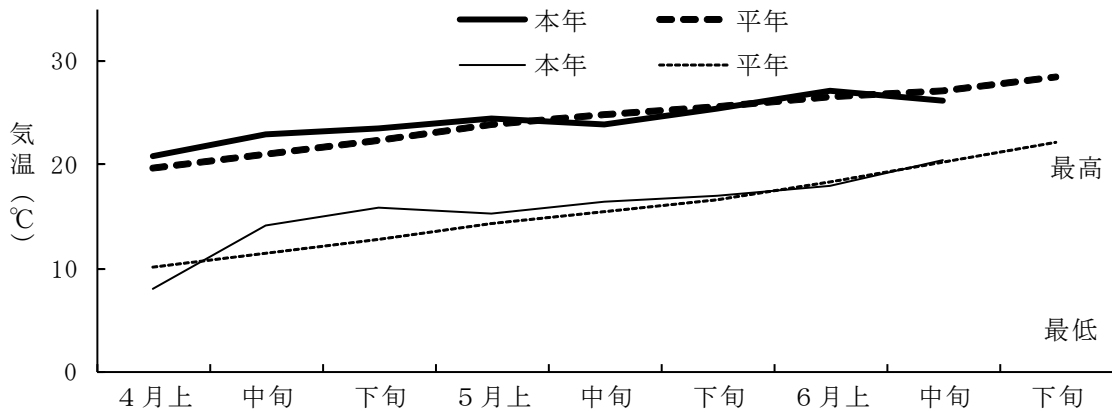
令和4年6月29日  
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（6月25日から7月24日） 令和4年6月23日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	30	60	九州南部では気温は高く、降水量は平年並みか少なく、日照時間は多い見込み。 奄美地方では気温、降水量、日照時間ともに平年並みの見込み。
	奄美地方	30	30	40	
降水量	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	30	40	30	
日照時間	九州南部	20	30	50	
	奄美地方	30	40	30	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



### 【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	早期水稲	いもち病（穂いもち）	多	多
		斑点米カメムシ類	やや少	やや少
	普通期水稲	いもち病（葉いもち）	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床）	うどんこ病	多	やや多
		炭疽病	やや少	並
		ハダニ類	やや多	やや多
	サトイモ	疫病	やや少	やや少
普通作・野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	並	並
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	並	並
		アザミウマ類（県本土）	やや少	やや少
果樹	カンキツ	そうか病（果実）（県本土・熊毛地域）	並	やや少
		”（奄美地域）	やや少	やや少
		かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		”（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		”（奄美地域）	並	並
	ナシ	黒星病	多	多
		ハダニ類	並	やや多
茶樹	チャ	炭疽病	やや多	やや多
		輪斑病	やや多	やや多
		チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
		チャノキイロアザミウマ	少	少
		クワシロカイガラムシ	やや少	やや少

## 【 病 害 虫 発 生 予 報 】

### I. 普通作物

#### 1. 早期水稲

(1) いもち病（穂いもち）（令和4年度注意報第2号（6月20日付け）参照）

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

##### イ 予報の根拠

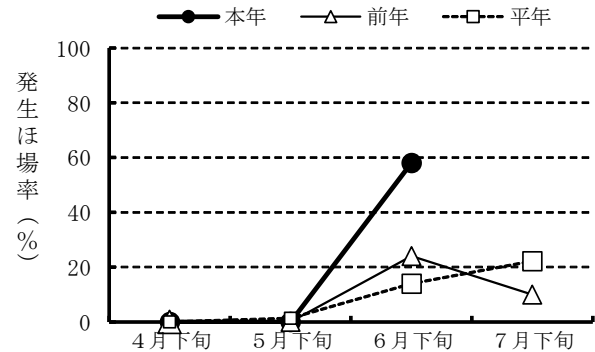
(ア) 調査結果 発生量：多

葉いもちの発生ほ場率58%（平成14%）  
：高い（+）

(イ) 気象予報

降水量：平成並みか少ない（-）

BLASTAMで感染好適日が認められた（+）



いもち病の発生ほ場率（早期水稲）

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期と穂ぞろい期に実施する。

(イ) 粒剤による穂いもち防除を行ったほ場でも、出穂後不順な天候が続く場合は、穂ぞろい期に粉剤または液剤による補完防除を行う。

(ウ) 防除時期を失しないように注意する。

(2) 斑点米カメムシ類（令和4年度技術情報第4号（6月20日付け）参照）

（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ 等）

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生時期 出穂期以降

(ウ) 発生量 やや少

##### イ 予報の根拠

(ア) 畦畔雑草草地のすくい取り調査（捕虫網20回振り）による捕獲箇所率は82.1%（平成75.7%）と平成並みで、平均捕獲虫数は5.1頭（平成13.1頭）と平年に比べて少なかった。

(イ) 県全体の程度別発生割合は中程度以上が8.9%（平成28.2%）で、平年に比べて低かった。

表 早期水稲周辺イネ科雑草草地における斑点米カメムシ類の地域別、程度別発生割合

地 域	調査箇所数	捕獲 <sup>注1)</sup> 箇所率	平均 <sup>注2)</sup> 捕獲虫数	程度別発生割合 <sup>注3)</sup>				
				甚	多	中	少	無
南 薩	28	67.9	6.4	0	3.6	10.7	53.6	32.1
大 隅	28	96.4	3.9	0	0	3.6	92.9	3.6
県全体	56	82.1	5.1	0	1.8	7.1	73.2	17.9
県全体平成 <sup>注4)</sup>	56	75.7	13.1	3.6	7.1	17.5	47.5	24.3

注1) 捕獲箇所率(%) = 捕獲箇所数 / 調査箇所数 × 100

注2) 平均捕獲虫数 = 総捕獲虫数 / 調査箇所数

注3) すくい取り調査(捕虫網20回振り)の捕獲虫数を基準とし、甚:61頭以上,多:60~31頭,中:30~11頭,少:10~1頭,無:0頭とした。なお、調査は令和4年6月1日~6日に行った。

注4) 平成は過去5か年(2017~2021年)の平均値

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 斑点米カメムシ類による斑点米の混入は米の検査等級格下げにつながり、特に早期水稲では品質低下の主な要因となる。

(イ) 水田周辺の雑草地等が飛来源となるので、出穂の10日前頃までに畦畔の草払いなどのほ場管理に努め、発生密度の低下を図る。

(ウ) 毎年斑点米被害が多い地域では、穂揃期と穂揃期の7～10日後（乳熟後期）の2回防除が基本である。特に乳熟後期の幼虫の発生には十分注意する。

(エ) 防除は農薬の使用基準を遵守し、薬剤が周囲に飛散しないようにする。

## 2. 普通期水稲

### (1) いもち病（葉いもち）

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

#### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0%（平年0.2%）：やや低い

#### (イ) 気象予報

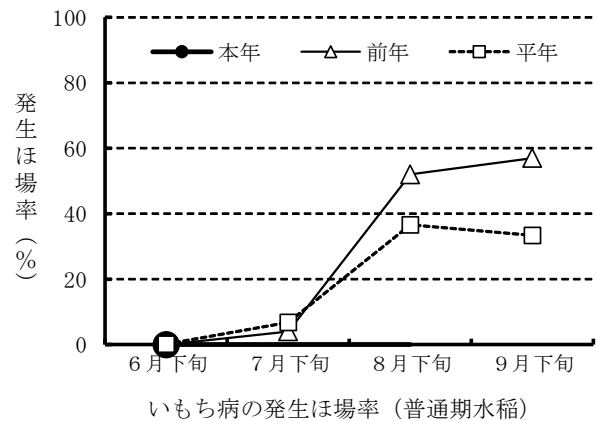
降水量：平年並みか少ない（－）

#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 補植用の置き苗は発生源になることが多いので、早めに処分する。

(イ) 常発地域や前年の多発地域では十分に注意し、発生を認めたら初期防除に努める。

(ウ) 窒素過多は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



### (2) イネウンカ類およびコブノメイガの誘殺虫数

セジロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は5月30日（平年5月26日）で、平年並み。

トビイロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は6月17日（平年6月29日）で、平年よりやや早かった。

なお、一部の早期水稲圃場で、6月13日に中齢～老齢幼虫の寄生を確認している。

コブノメイガ：フェロモントラップでの初誘殺日は5月7日（平年5月29日）で、平年より早かった。

表 各種トラップでの誘殺虫数と初誘殺日

月・半旬	セジロウンカ				トビイロウンカ				コブノメイガ	
	60W予察灯		大型吸引トラップ		60W予察灯		大型吸引トラップ		フェロモントラップ	
	本年 <sup>注1)</sup>	平年 <sup>注2)</sup>	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	(平年) <sup>注3)</sup>
6・1	1	11.2	3	1.5	0	0	0	0	2	(15.0)
2	16	24.1	3	3.0	0	0.1	0	0	14	(35.0)
3	1	16.3	2	9.9	0	0	0	0	3	(20.3)
4	26	34.2	0	8.8	1	0.1	0	0	0	(26.8)
5	11	17.5	0	11.3	2	0.3	0	0.4	4	(11.5)
6		44.7		11.0		9.2		1.2		(7.8)
合計	55	148.0	8	45.5	3	9.7	0	1.6	23	(116.4)
初誘殺日	5/30	5/26	5/30	5/25	6/17	6/29	-	7/9	5/7	(5/29)

注1) 本年5半旬のデータは、6月21～23日の合算。 注2) 平年は2012年～2021年の10年間の平均。 注3) (平年)は2018年～2021年の4年間の平均。なお、最新の誘殺状況は、ホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kagoshima>) を参照。

## Ⅱ. 野菜

### 1. イチゴ（苗床）

#### (1) うどんこ病

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率77%（平年41%）：高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（-）

##### ウ 防除上注意すべき事項

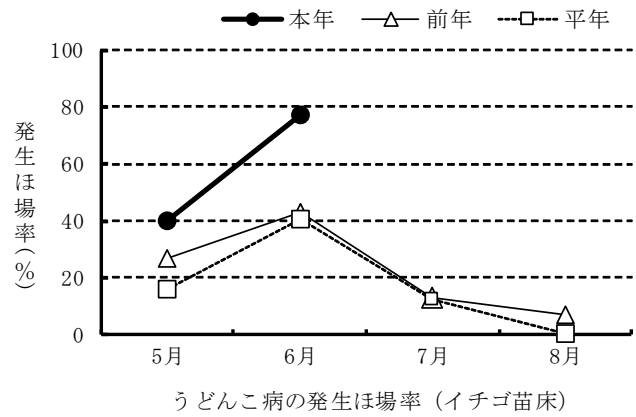
(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬剤が十分かかるよう散布する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、系統や作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



#### (2) 炭疽病

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0%（平年2%）

：やや低い（-）

6月潜在感染確認ほ場率64%（平年52%）

：やや高い（+）

6月潜在感染確認株率 20%（平年11%）

：高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

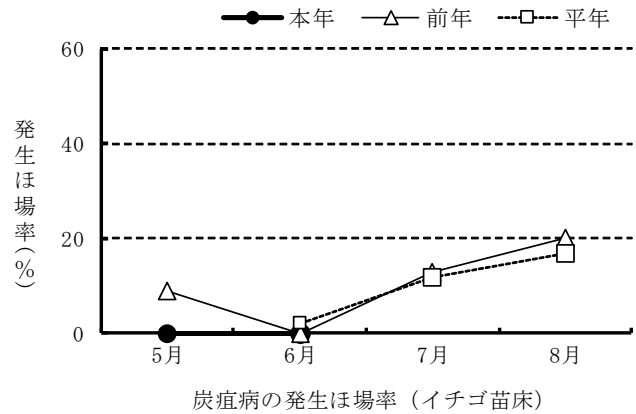
##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

(イ) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

(ウ) 生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。また、隣接している株も併せて処分する。

(エ) 薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

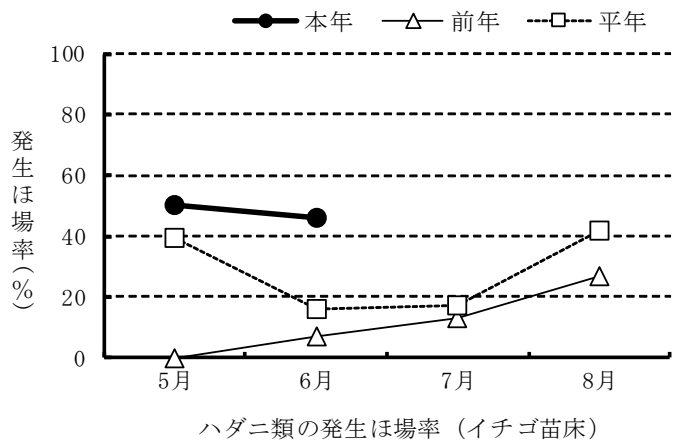
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
発生ほ場率46%（平年16%）  
：高い(+)  
発生程度は低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

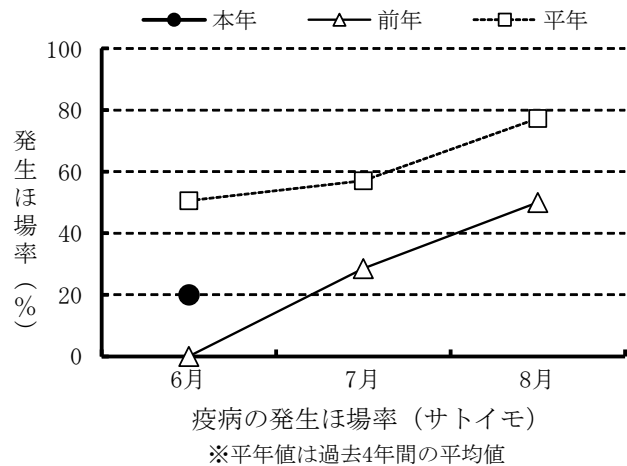
- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率20%（平年50%）  
：やや低い(-)

(イ) 気象予報

- 降水量：平年並みか少ない(-)
- 気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ほ場の額縁部分で初発しやすく、降雨が続くと急激に発生が拡大するので、発病の有無をこまめに観察し、早期発見に努める。
- (イ) 発生を確認したら直ちに治療効果がある薬剤を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。
- (ウ) 発病茎葉は発生源となるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。



疫病の発生ほ場率（サトイモ）  
※平年値は過去4年間の平均値

3. 野菜・花き・作物共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

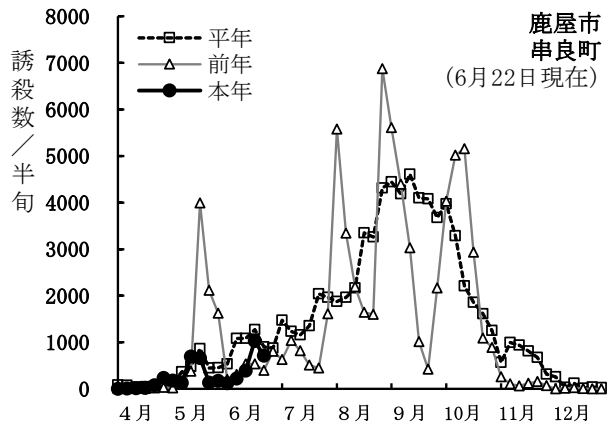
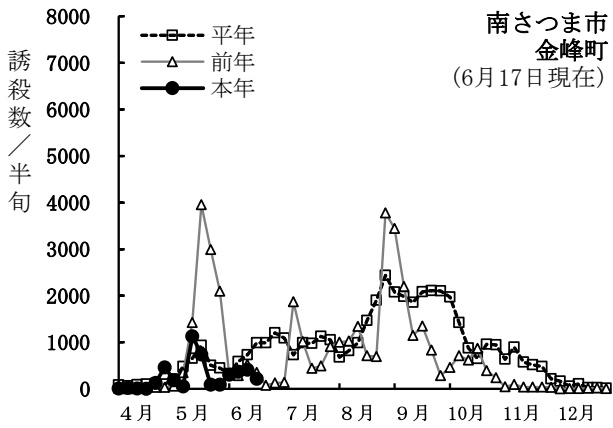
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 サトイモ、イチゴ、サツマイモ、オクラ、根深ネギ、キク等
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
- 5月のフェロモントラップ誘殺数：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害（白変葉）するので、白変葉を目安に、早期発見と初期防除に努める。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



ハスモンヨトウのフェロモントラップでの誘殺状況



### Ⅲ. 花き（キク）

#### (1) ハダニ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率30%（平年29%）：並

##### ウ 防除上注意すべき事項

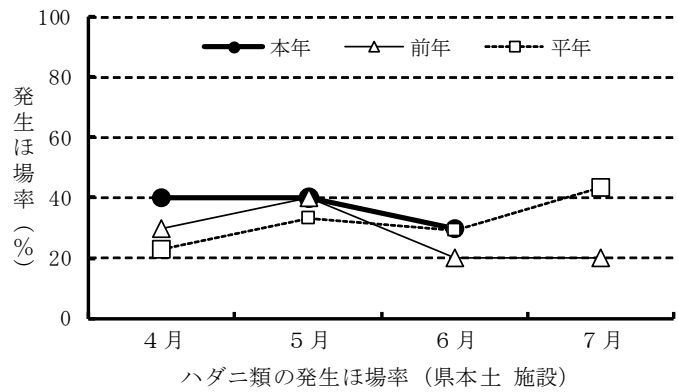
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等で

スポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



#### (2) アザミウマ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率20%（平年35%）

：やや低い（－）

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(T S W

V), キク茎えそ病(C S N V)を媒介する。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

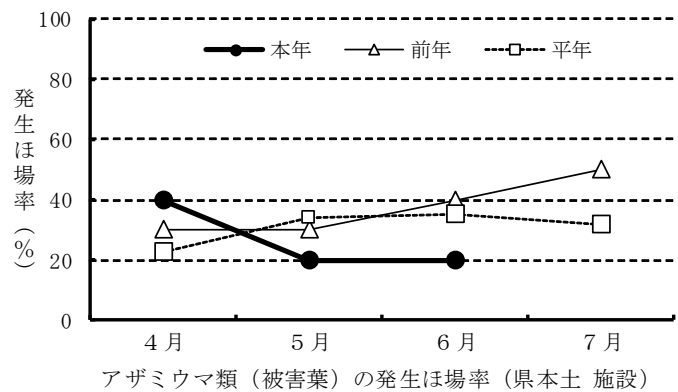
(ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

(エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。

(オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残さを処分する。



#### IV. 果 樹

##### 1. カンキツ

###### (1) そうか病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

###### (イ) 発生量

県本土・熊毛地域 (果実) やや少

奄美地域 (果実) やや少

###### イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

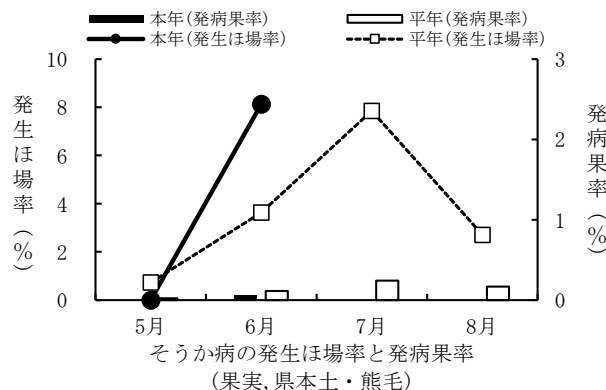
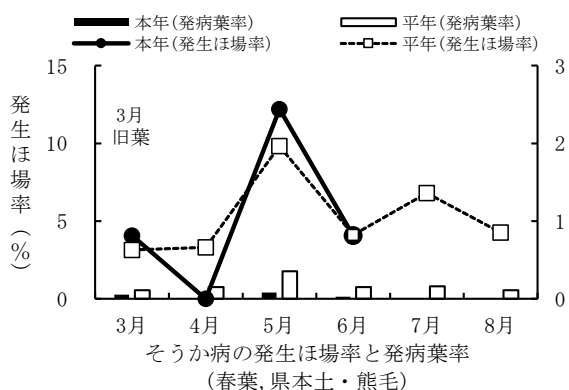
###### (ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	4% (平年 4%) : 並	8% (平年 4%) : やや高い (+)
発病率	0.03% (平年0.14%) : やや低い (-)	0.1% (平年0.1%) : 並

###### (イ) 気象予報

気温 : 高い (-)

降水量 : 平年並みか少ない (-)



<奄美地域>

###### (ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 6%) : やや低い (-)	0% (平年 7%) : やや低い (-)
発病率	0% (平年0.1%) : やや低い (-)	0% (平年0.1%) : やや低い (-)

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉および発病果は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 降雨により感染が広がるため、発生の多いほ場では薬剤防除に努める。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

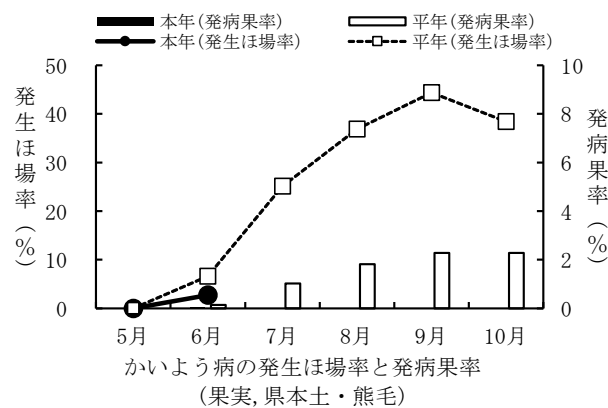
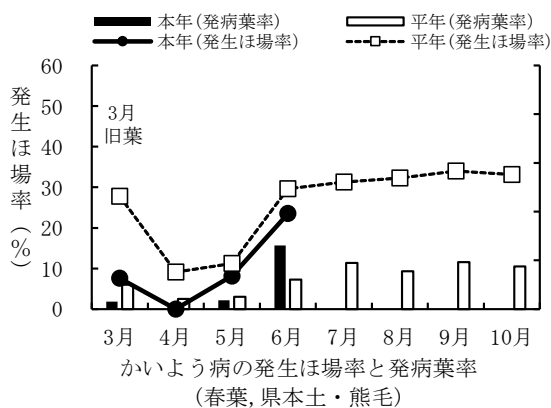
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	やや少
発生ほ場率	24% (平年 30%) : やや低い (-)	3% (平年 7%) : やや低い (-)
発病率	2.6% (平年1.2%) : 高い (+)	0.1% (平年0.1%) : やや低い (-)



(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか少ない (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 17%) : やや低い (-)	0% (平年 0%) : 並
発病率	0% (平年0.2%) : やや低い (-)	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、本虫の防除を徹底する。

(イ) 台風による風傷害から感染しやすいので、台風前の防除を徹底する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量  
県本土・熊毛地域 並  
奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

- (ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少  
発生ほ場率 17% (平年 23%)  
：やや低い (-)  
寄生葉率 2.9% (平年 5.9%)  
：やや低い (-)

(イ) 気象予報

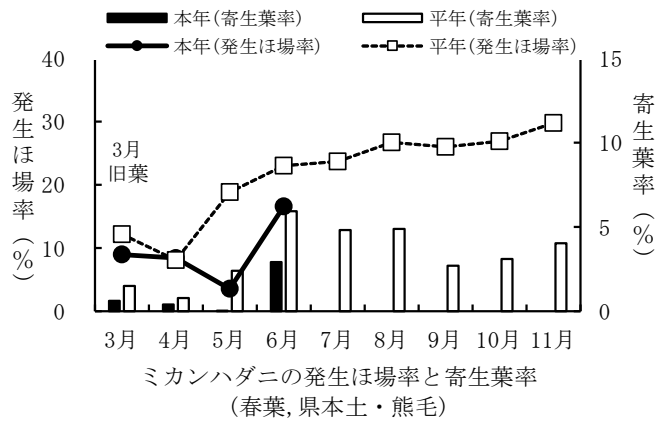
降水量：平年並みか少ない (+)

<奄美地域>

- (ア) 調査結果(春葉) 発生量：並  
発生ほ場率 0% (平年 1%)：並  
寄生葉率 0% (平年 0.04%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率30~40%)を目安に防除する。
- (イ) マシン油の散布は、光合成の低下等により果実品質へ悪影響を及ぼすことから、早生・普通温州では7月上旬まで、ポンカン及びタンカン等の中晩柑類では7月下旬までとする。



2. ナシ

(1) 黒星病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

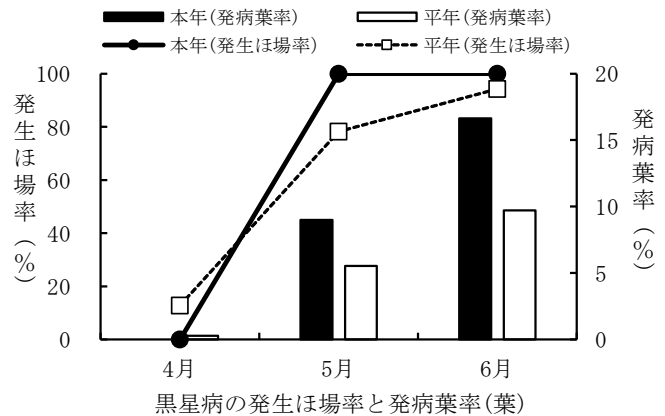
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場率 100% (平年 94%)  
：やや高い (+)  
発病葉率 17% (平年 10%)  
：やや高い (+)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病果および発病葉は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 防除は新梢伸長期までを重点に、10~14日間隔で降雨前に予防散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 38% (平年25%)

：並

寄生葉率 5% (平年2%)

：やや高い(+)

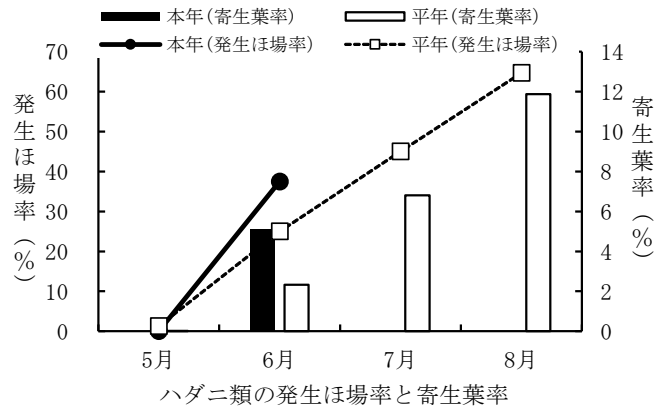
(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤による防除は発生初期に行い、葉裏や徒長枝にもかかるよう十分量散布する。

(イ) 抵抗性の発達を防ぐために、同一薬剤、同一系統の薬剤の使用は年1回とする。



防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 薬剤散布間隔は、散布からの累積降水量250～300mmを目安とする。薬剤散布後1ヶ月半以上経過すると、降水量が少なくても薬剤の残効は期待できないので、次の散布を行う。

イ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

ア 成虫は7月中旬まで発生し8月まで産卵するので、成虫の活動がにぶい朝夕の時間帯に捕殺する。また、卵の圧殺・幼虫の刺殺の効果は確実である。

イ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。

ウ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断(ストックカバー法)すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法

時期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生態	← 成虫発生期			← 産卵期			← 幼虫食入期					
物理的防除法	← 成虫の捕殺			← 卵の圧殺・幼虫の捕殺								
生物的防除法	↓			↓			↓			↓		
薬剤防除法	← 殺虫剤散布			← 殺虫剤散布			← 殺虫剤散布			← 殺虫剤散布		

注) 県本土の発育ステージを示す。

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

ア 予察灯での誘殺虫数は、平年並みかやや少なく推移している (表1, 図1)。各予察灯での最新の誘殺虫数はホームページ (<http://www.jpnn.ne.jp/kagoshima>) を参照。

イ 餌植物 (ヒノキ) 球果の着果量は中程度 (球果量指数60) で、平年と比べてやや多かった (表2)。北薩は平年並みで、そのほかの地域は平年よりやや多かった。今後、新成虫が増加する可能性があるので注意する。

ウ 果実が吸汁されると、カンキツでは果汁が抜けてスポンジ状となり、落果する。ナシでは奇形果や果汁が抜けてスポンジ状となる。

エ 飛来を認めたら直ちに防除し、薬剤は比較的残効の長いネオニコチノイド系薬剤または合成ピレスロイド系薬剤を選択する。合成ピレスロイド系薬剤は、ハダニ類の発生を助長する可能性があるため、散布後はハダニ類の発生に注意する。

オ 防除にあたっては、薬剤の使用回数や使用時期に注意する。

表1 予察灯の誘殺虫数, 6月第1~4半旬の合計 (単位: 頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ		チャバネアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	159	719	18	145
いちき串木野市湊町	1	114	0	48
出水市美原町	65	1,213	25	933
鹿屋市串良町	31	196	8	29
誘殺虫数	並		並	

注1) 平年は、過去10年間の平均。

2) 予察灯の光源は、南さつま市金峰町は水銀灯100W, 鹿屋市串良町は捕虫灯20W, 他は捕虫灯40W。

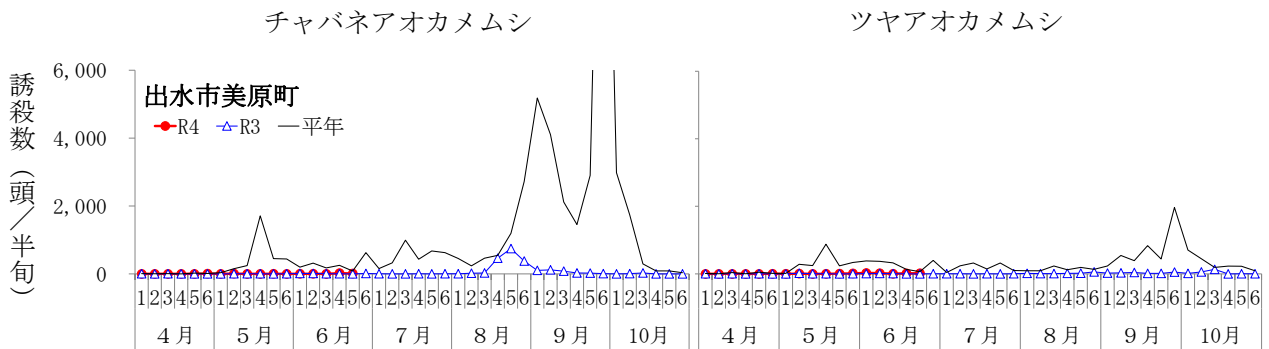


図1 果樹カメムシ類の出水市美原町の予察灯での誘殺虫数

表2 餌植物 (ヒノキ) の球果量指数

調査地域	本年	平年
南薩	60	43
北薩	52	46
始良	69	45
大隅	64	40
県本土	60	45

注1) 球果量は目視による遠観調査 (30地点), 評価は7段階 (極多, 多, やや多, 中, やや少, 少, 極少)

2) 球果量指数は愛媛県 (2018) による。球果量が多いと指数が高く, 少ないと指数が低くなる

3) 球果量指数:  $((\text{極多地点数} \times 7) + (\text{多地点数} \times 6) + (\text{やや多地点数} \times 5) + (\text{中地点数} \times 4) + (\text{やや少地点数} \times 3) + (\text{少地点数} \times 2) + (\text{極少地点数} \times 1)) / (\text{総地点数} \times 7) \times 100$

4) 平年は、2012~2021年の10年間の平均

## V. 茶 樹

### (1) 炭疽病

#### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
 (イ) 発生量 やや多

#### イ 予報の根拠

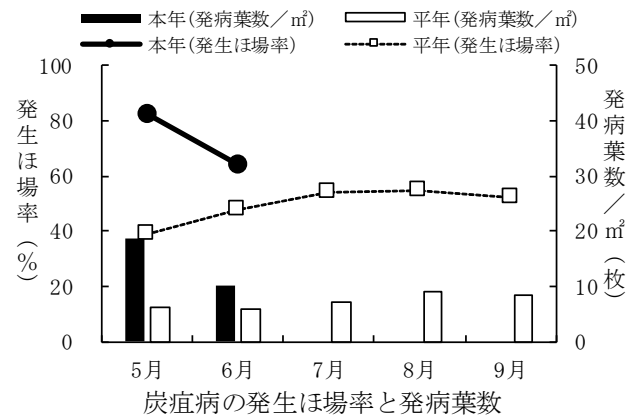
- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
 発生ほ場率64% (平年48%)  
 : やや高い (+)  
 1 m<sup>2</sup>当り病葉数10.2枚 (平年5.8枚)  
 : 多 (+)

#### (イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (-)

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病に弱い品種や多発ほ場では、萌芽～1葉期に予防防除を行う。  
 (イ) 降雨が続きすでに感染が予想される場合は、治療剤で防除する。  
 (ウ) 三番茶期は萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期 (摘採前日数) を厳守する。  
 (エ) 更新園では、裾部に残った病葉が伝染源となり再生芽へ感染するため、1～3葉期に予防効果のある薬剤で防除する。



### (2) 輪斑病

#### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
 (イ) 発生量 やや多

#### イ 予報の根拠

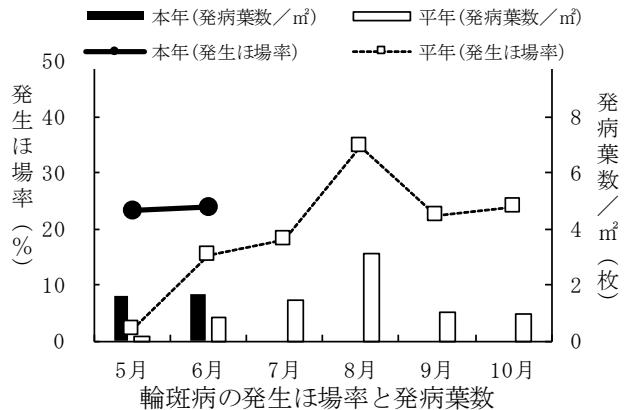
- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
 発生ほ場率24% (平年15%)  
 : やや高い (+)  
 1 m<sup>2</sup>当り病葉1.7枚 (平年0.9枚)  
 : やや多 (+)

#### (イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (-)

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除薬剤に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の薬剤を使用する場合は摘採3日後までに散布する。  
 (イ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。  
 (ウ) 本病に弱い品種では、更新園においても再生芽の整枝直後に薬剤防除を行う。  
 (エ) QoI剤耐性菌の発生が確認されているほ場では、本系統薬剤の使用を避け、耐性菌未発生のほ場でも、QoI剤の使用は年1回とする。



(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ チャハマキ	やや少 やや少
(ウ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ チャハマキ	並 並

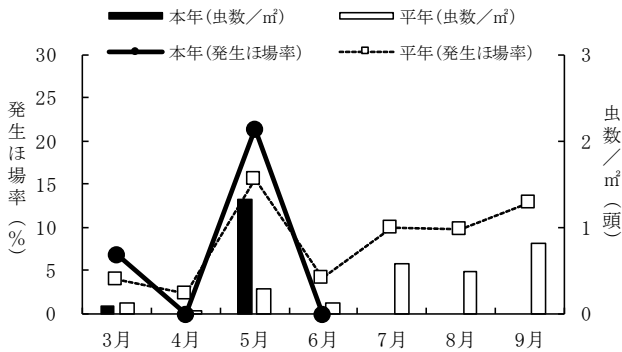
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

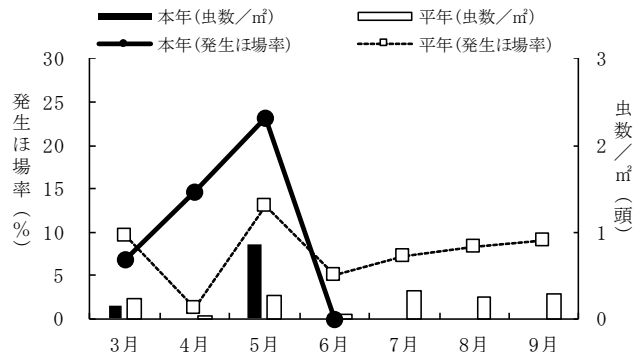
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 4%) : やや低い(-)	0% (平年 5%) : やや低い(-)
虫数(1㎡当たり)	0頭(平年0.1頭) : やや少(-)	0頭(平年0.1頭) : 並
<南九州市知覧町フェロモントラップ>		
誘殺数(5月1旬~6月4旬)	202頭(平年414頭) : やや少	159頭(平年394頭) : やや少
第2世代の発蛾ピーク	並	並

ウ 防除上注意すべき事項

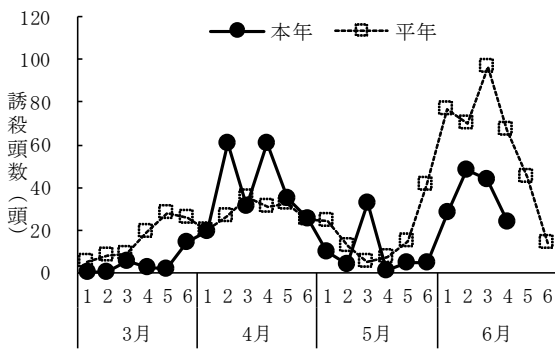
- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 薬剤による防除適期は、ふ化～2齢期(発蛾最盛日の10～15日後)である。



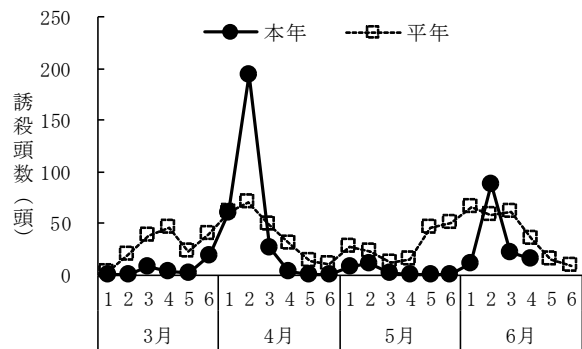
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



知覧でのフェロモントラップ誘殺数 (チャノコカクモンハマキ)



知覧でのフェロモントラップ誘殺数 (チャハマキ)



(4) チャノホソガ

ア 予報内容

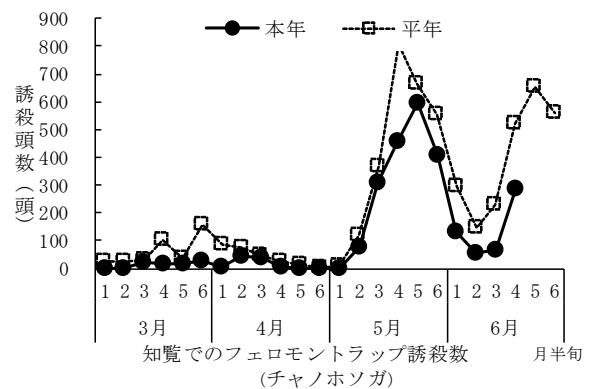
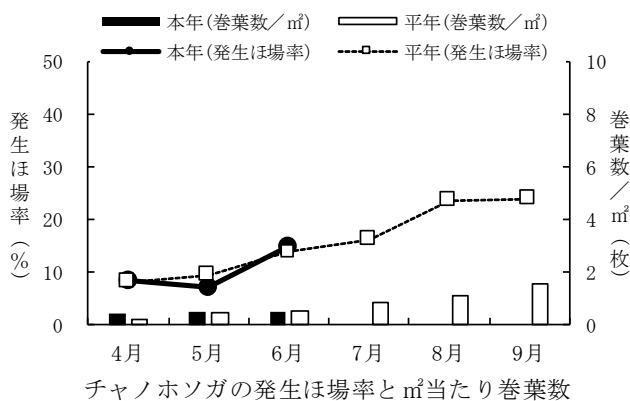
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並
- (ウ) 発生時期 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
 発生ほ場率 15% (平年14%)：並  
 m<sup>2</sup>当たり巻葉数 0.5枚 (平年0.5枚)：並  
 <知覧町フェロモントラップ>  
 誘殺数 (5月1半旬~6月4半旬)：2,384頭 (平年3,705頭)：やや少  
 第2世代の発蛾ピーク：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は三番茶萌芽～1葉期に行うが、摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期(摘採前日数)を厳守する。
- (イ) 薬剤散布は、葉裏への産卵や幼虫の潜葉を確認してから行う。
- (ウ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(5) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 並  
 チャノキイロアザミウマ 少

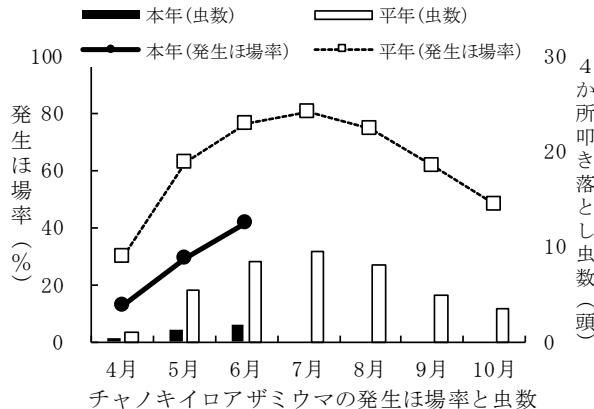
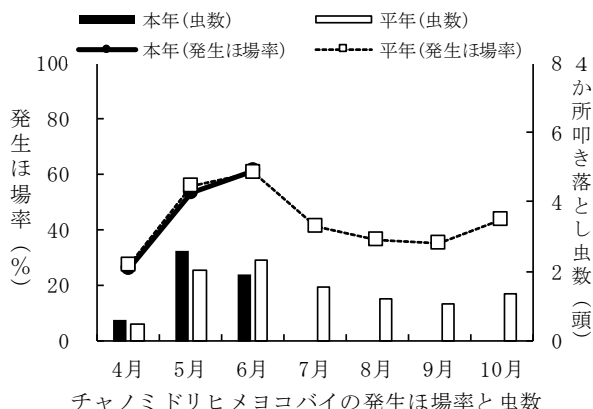
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	並	少
発生ほ場率	61% (平年 60%)：並	42% (平年 76%)：低い (-)
虫数(4か所叩き落とし)	1.9頭(平年2.3頭)：並	1.8頭(平年8.4頭)：少ない (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。
- (イ) 更新園では、萌芽～1葉期に防除する。



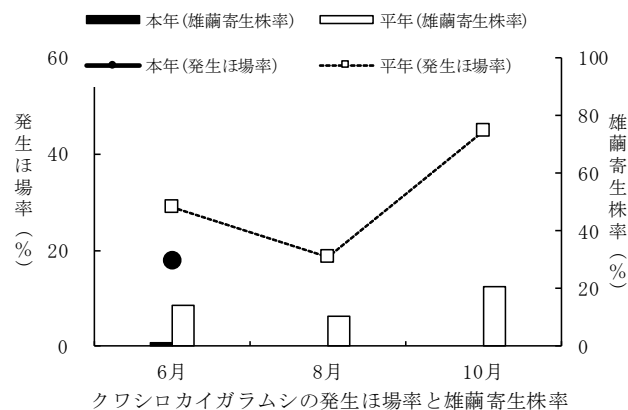
(6) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少
- (ウ) 発生時期 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率18% (平均29%)  
：やや低い (-)
- 雄繭の寄生株率1.1% (平均14.1%)  
：低い (-)



(イ) 有効積算温度による防除適期 (第2世代ふ化最盛期) 予測

地点	ふ化最盛期		
	本年	(参考) 前年	前々年
枕崎	7月7日	6月27日	7月5日
加世田	7月7日	6月27日	7月8日
溝辺	7月22日	7月17日	7月22日
鹿屋	7月11日	7月3日	7月10日
志布志	7月13日	7月5日	7月11日

注1) 予測には各地のアメダス観測地点における本年の日平均気温を用い(6月22日まで)、6月23日以降は各観測地点の平年値を用いた。

注2) 有効積算温度は、各地のアメダス観測値より算出した第一世代ふ化最盛日の翌日を起算日として積算した。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤はふ化最盛日から5日以内に、枝や幹に十分かかるように散布する。なお、ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査してふ化最盛日を把握する。
- (イ) 更新園でのふ化最盛期の防除は、茶株内の枝幹へ薬液が付着しやすく高い効果が期待できる。

.....

## 防除に関する今月の留意事項

### 1 チャトゲコナジラミ

県内全域で発生がみられ、多発ほ場も確認されている。多発するとほ場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

- (1) 三番茶摘採園では裾刈りを行うことで寄生葉が除去され密度低下が期待できる。
- (2) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高い。また、本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。
- (3) 更新園では裾部等に薬剤がかかりやすいため、適期に防除を行う。

## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。